

教員紹介冊子

(2018年4月作成)

法政大学大学院 国際文化研究科

氏名	栗飯原 文子 (あいほら あやこ) 准教授
こんな研究をしています	英語圏・仏語圏アフリカの文学、特に小説を中心に研究しています。 そのほか、アフリカの映画や音楽についても学んでいます。
こんな成果を挙げています	<p>【共著】 <i>Crossing Places: New Research in African Studies</i>, Cambridge Scholars Publishing, 2007年. 『グローバルヒストリーとしての「1968年」——世界が揺れた転換点』ミネルヴァ書房, 2015年</p> <p>【論文】 “Modernity, Struggle and the Urban Dream: Yvonne Vera’s <i>Butterfly Burning</i>”, <i>Studies in English Literature</i>, English Number 49, 日本英文学会, 2008年3月. “African “Modernist” Mythopoeia and Aesthetic Traditionalism: Yvonne Vera’s <i>Nehanda</i>”, <i>Studies in English Literature</i>, English Number 53, 日本英文学会, 2012年3月. 「移動をめぐるアフリカの物語」『思想』岩波書店, 2017年8月号.</p> <p>【翻訳】 ヴィジャイ・プラシャド『褐色の世界史——第三世界とはなにか』水声社, 2013年 アルンダティ・ロイ『ゲリラと森を行く』以文社, 2013年. チヌア・アチェベ『崩れゆく絆』光文社古典新訳文庫, 2013年. ウォレ・ショインカ「狂人と専門家」『紛争地域から生まれた演劇7』国際演劇協会日本センター, 2016年. チゴズィエ・オビオマ『ぼくらが漁師だったころ』早川書房, 2017年.</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・パンアフリカニズムの歴史 ・アフリカ哲学 ・旧植民地世界の文学 ・アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（いわゆる第三世界）の連帯の歴史 ・第三世界における民族主義とマルクス主義の展開
こんな授業を行なっています	アジア・アフリカ・ラテンアメリカの（出身の作家による）さまざまな文学作品を精読して、文学作品が時代、社会、世界の状況にどのように応えているのか考え、地域と言語を横断した世界文学への視座を身に付けることを目指します。
学会や社会でこんな活動をしています	日本英文学会、日本比較文学会、日本アフリカ学会、African Literature Association に所属しています。

氏名	浅川 希洋志 (あさかわ きよし) 教授
こんな研究をしています	<ol style="list-style-type: none"> 1. 最適経験 (optimal experience) といわれるフロー経験 (flow experience) と精神的健康・Well-being の関係について。 2. 教育プロセスにおけるフロー経験と最適発達の関係について。
こんな成果を挙げています	<ol style="list-style-type: none"> 1. 『フロー理論の展開』(共編著) 世界思想社 (2003年)。 2. “Flow Experience and Autotelic Personality in Japanese College Students: How Do They Experience Challenges in Daily Life?” (Journal of Happiness Studies, 5, 2004). 3. 「フロー経験の諸側面」 島井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版 (2006年)。 4. “Stress and Coping among Asian Americans: Lazarus and Forkman’s Model and Beyond” (共著) (In P. T. P. Wong, & L. C. J. Wong (Eds), Handbook of Multicultural Perspectives on Stress and Coping, Springer, 2006). 5. “Flow Experience, Culture, and Well-being: How Do Autotelic Japanese College Students Feel, Behave, and Think in Their Daily Lives?” (Journal of Happiness Studies, 11, 2010). 6. 『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造—充実感をともなう楽しさと最適発達への挑戦』(共著) 学文社 (2011年)。 7. 「楽しさと最適経験の現象学—フロー理論—」 鹿毛雅治編『モチベーションをまなぶ12の理論』金剛出版 (2012年)。 8. 「先生、すごく楽しかった。時間忘れちゃった—フロー理論—」『児童心理』1月号, 金子書房 (2013年)。 9. 「ポジティブ心理学—“精神疾患の治療”から“充実した人生”の研究へ—」『児童心理』10月号臨時増刊, 金子書房 (2013年)。 10. 『日常生活を充実させる』テクノロジー」(自動車技術, 68, 2014)。 11. “Universal and Cultural Dimensions of Optimal Experiences” (共著) (Japanese Psychological Research, 58, 2016). 12. (監訳) チクセントミハイ『クリエイティビティ—フロー体験と創造性の心理学』世界思想社 (2016年)。 13. “The Role of Active and Passive s-WOM: Does Participation Affect e-Loyalty?” (共著) (In J. A. Trespacios-Gutierrez, R. Vazquez-Casielles, E. Estrada-Alonso, & C. Gonzalez-Mieres (Eds), Marketing Insights: la respuesta del comercio a las tendencias de comportamiento social del consumidor, KRK Ediciones, 2017).
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	文化と心の働きに関する研究。例えば、異なる文化で育った人々は、同じ場面で同じような心の働き方や経験をやるだろうか。また、学校教育は文化の担い手としての子どもたちにどのようなことを期待し、そのような教育プロセスの中で、子どもたちはどのような心の働き方を身につけていくのだろうか、といったことに興味を持っています。
こんな授業を行なっています	「異文化社会論 IIA/B」：文化心理学の立場から心の働きと文化の関連について学ぶとともに、異文化社会／多文化社会における適応とはどういうことかを考えていきます。また、受講者が自分自身の異文化体験に対する考察を深めていくための一助となるような授業になればと考えています。
学会や社会でこんな活動をしています	所属学会：日本心理学会、International Positive Psychology Association、European Network for Positive Psychology。フロー理論への関心の高まりから、教育、産業、ビジネスといった分野での講演の機会が増えています。また、小・中学校の学校研究のサポート、企業内のメンタルヘルス・モニタリング・システムの構築などにも関わっています。

氏名	和泉 順子 (いずみ みちこ) 准教授
こんな研究をしています	<p>情報通信技術は今や社会基盤の一つとして普及発展しています。しかし技術は、時代や社会動向に依存して開発の方向性が変わり、また問題認識や視点も変わってきます。以前は問題にならなかったものが今は大問題になっていたり、優れた技術でも普及しなかったりするの、なぜなのか。ネットワーク技術と、その上を流通する実社会の情報をどのように制御する必要があるのか、情報セキュリティの在り方の観点からも、国際社会との連携や協調にも気を配りつつ研究を続けています。</p>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> - 笹川 喬介、和泉 順子、「誹謗中傷問題のインターネットによる影響に関する考察」、情報処理学会 第61回電子化知的財産・社会基盤研究会 (EIP)・第156回 DPS・第89回 GN 合同研究発表会、 No. 27, pp.1-6, 2013 年9月 - M. IZUMI, M. SATO, K. MATSUI, H. SUNAHARA, "A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", the 2011 ITS World Congress, Oct. 2011. - M. SATO, M. IZUMI, H. ITO, K. UEHARA, J. MURAI, "Criteria for Privacy and Integrity Protection in Probe Vehicle Systems", the 2011 ITS World Congress, Oct. 2011. - M. SATO, M. IZUMI, H. SUNAHARA, K. UEHARA, J. MURAI, "Threat analysis and protection methods of personal information in vehicle probing system", The Third International Conference on Wireless and Mobile Communications (ICWMC2007), March, 2007
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>インターネット上を流通する実空間情報の内、主に個人情報やプライバシー関連、または地理位置空間情報等に関する分野で研究を行っています。特に、車両の情報化に伴い、ITS (高度道路交通システム: Intelligent Transport Systems) 分野の研究開発や技術動向、システムの普及促進、災害時における車や道路行政の在り方、情報セキュリティ、プライバシー情報に関する国際連携や関連法規の動向等にも取り組んでいます。</p>
こんな授業を行なっています	<p>多文化ネットワーク論で、基本的な情報ネットワーク技術の確認と、関連分野の最新技術動向などを見つつ、開発されている最先端の技術が、広く社会一般に使われるようになるために、どのような準備が必要なのか。一方的に提示するのではなく、議論を通じて、今何が問題なのか、今後何が必要になるのかを考える授業を行っています。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>経済産業省基準認証研究開発事業「プローブ情報システムの匿名性・セキュリティ評価基準等に関する標準化」や、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構の戦略的国際標準化推進事業「ITS プローブ情報システムのサービスアーキテクチャ構築に関する標準化」等、他大学・組織との共同または委託研究で技術の国際標準化にも取り組んでいます。また、日本ソフトウェア科学会の編集委員も続けています。</p>

氏名	今泉 裕美子 (いまいずみ ゆみこ) 教授
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・国際関係学の方法論を、日本における国際関係研究の系譜である植民政策研究からの発展を軸に研究する。 ・ミクロネシアと日本（沖縄など個別の地域との関係も含む）との関係の歴史および現状を、アジア及び太平洋島嶼の国際関係のなかで追究。具体的には、①日本の南洋群島統治政策、②日本統治下ミクロネシア社会と人々の暮らし、文化、③沖縄を中心に北海道、八丈島、東北など日本からの、また朝鮮半島、中国などからの「南洋移民」、戦時動員、及び「引揚げ」、④太平洋戦争と米軍のミクロネシア占領、信託統治、⑤ミクロネシアの「復興」と脱植民地化、⑥南洋群島帰還者の戦後の生活再建と地域社会、諸活動（団体形成、再渡航運動、補償請求、慰霊、ミクロネシアとの「交流」）、⑦戦後日本の太平洋島嶼政策、など。以上を、旧南洋群島・ミクロネシア関係史・資料（公文書、手紙、写真、モノなど）の国内外での収集、聞き取りやフィールドワークを通じて研究。
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・「太平洋・島サミットにみる沖縄の役割 - 沖縄の地域協力再考の手がかりとして」小柏葉子（広島大学教授）研究代表『地域協力と越境的ネットワークの変容に関する地域間比較研究 - 海域島嶼を事例として - 2010 年度～2012 年度科学研究費補助金（基盤B 一般）研究成果報告書』2013 年。 ・「南洋群島研究」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011 年。 ・「南洋群島への朝鮮人の戦時労働動員 - 南洋群島経済の戦時化からみる一側面」『季刊戦争責任研究』64、2009 年。 ・印東道子編『ミクロネシアを知るための58章』明石書店、2005 年の第18章、49章、50章執筆。 ・「南洋へ渡る移民たち」大門正克他編『近現代日本社会の歴史 近代社会を生きる』吉川弘文館、2003 年。 ・「丸木俊がみた「南洋」」『法政大学沖縄文化研究所所報』第51号、2002 年。 ・「沖縄民謡にみる「南洋移民」、日本移民学会 1997 年夏季ワークショップ（日本ポピュラー学会と共催）「日系移民の芸能・音楽」での報告、於東京経済大学。 ・「矢内原忠雄の国際関係研究と植民政策研究—講義ノートを読む—」『国際関係学研究』第23号、1997 年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・旧南洋群島をめぐる芸能・芸術活動、南洋群島（あるいは内地）で作られた歌や芝居などから、南洋群島内外の戦前と戦後の人々の暮らしや意識をみたい…沖縄県立博物館・美術館「美術家たちの「南洋群島」展（2008 年 11 月 7 日～2009 年 1 月 18 日）」では展示検討委員。また画家丸木俊、版画家備間比呂志、島唄歌手嘉手苺林昌、金城実など諸氏、沖縄芝居の役者などを取材したり、南洋群島に関する絵画、映像にも関心を向けてきた。 ・ミクロネシアを中心とする太平洋島嶼の地域協力、地域認識および歴史認識。核実験被害と非核運動。先住民運動。
こんな授業を行っています	<p>日本の植民地政策とその下で形成された植民地社会、そこに生きた人々の暮らし、仕事、運動、移動など、また彼らにとってのアジア・太平洋戦争と戦後を、国際関係学、歴史研究を軸に行う（「異文化社会論 I A B」）。院生の個別指導では、先行研究を読み込み、「足」を「使って史・資料を徹底的に収集し、研究対象と研究者の立場性の相違、関係性を常に問い直すことを心がけて研究を進める。指導する院生のテーマには、高知県の一町からの満州やパラグアイ移民の研究、アルゼンチンの沖縄系移民の文化活動、などがある。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・所属学会…同時代史学会、日本植民地研究会、国際政治学会、歴史学研究会、日本移民学会。 ・進行中の共同研究・科研基盤研究（A）（代表：永原陽子京都大学教授）「兵士・労働者・女性の植民地間移動にかんする研究」 ・ミクロネシアの人々との研究交流…北マリアナ諸島の教員を対象としたNorthern Mariana Islands Teacher's Instituteにて講演（2006 年 10 月）。ミクロネシアでの研究会、HPO、研究者と情報交換を継続。 ・沖縄県地域史協議会会員…『具志川市史』（第4巻、移民・出稼ぎ編、2002 年、「南洋群島」執筆）、『沖縄県史』（各論編5 近代、2011 年、沖縄移民社会「南洋」執筆）、『沖縄市史』（移民編「南洋」、調査中）。 ・国内外での南洋群島関係史料の発掘と整理…米国議会図書館所蔵南洋群島関係史料の整理・リスト化（「海外における戦時期南洋群島文書史料の調査から」『けーし風』第37号、2002 年）、琉球大学図書館矢内原忠雄文庫の整理・リスト化（http://marwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/yanaihara/about.php）。 ・沖縄、本土の南洋群島帰還者の様々な組織と活動に参加し、取材させていただいています。

氏名	岩川 ありさ (いわかわ ありさ) 専任講師
こんな研究をしています	専門領域：日本近現代文学、文芸批評、クィア・スタディーズ 「トラウマと記憶」という問題について、言語や文化表象の側面から考えています。文芸誌などに発表されたばかりの小説や現在放映中のアニメーションまで幅広い対象へのアプローチをしています。
こんな成果を挙げています	<p>【論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「クィアな自伝—映画「ムーンライト」と古谷田奈月「リリース」をつないで」『早稲田文学増刊女性号』2017年9月発行、pp. 436-444。 ・「コミュニケーションクィア？—李琴峰「独舞」を手がかりにして」『現代思想』2017年8月号、pp. 186-194。 ・「どこを見ても記憶がある—多和田葉子『百年の散歩』論」『新潮』2017年5月号、pp. 154-157。 ・「境界の乗り越え方—多和田葉子『容疑者の夜行列車』をめぐる」『論叢クィア』5、クィア学会、pp. 82-102、2012年11月。 ・「記憶と前未来—林京子「祭りの場」と「長い時間をかけた人間の経験」をつないで」『言語情報科学』11、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻言語情報科学編集委員会、pp. 191-204、2013年3月。 <p>【共著】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ポピュラー・カルチャーと歴史認識—清家雪子「月に吠えらんねえ」における裂け目」西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える—批評・小説・ポップカルチャーをめぐる』ひつじ書房、2017年4月、pp. 110-128。 ・「pixivという未来——「クィア・アダプテーション」としての二次創作」押野武志編著『日本サブカルチャーを読む：銀河鉄道の夜からAKB48まで』北海道大学出版会、2015年4月、pp. 88-199。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・フェミニズム、クィア・スタディーズの視座からの文学テキストや表象分析。 ・マンガ、アニメーション、2.5次元ミュージカルなどのサブカルチャー研究。 ・文芸創作の理論的な理解。
こんな授業を行なっています	文献の講読を行いながら、文学テキストや表象テキストを読み解くための方法や理論について学びます。その上で、受講生それぞれの方が興味のある具体的なテキストについて分析し、発表し、議論を重ねながら、よりよい論文を書くために必要な知識やスキルを学びます。また、視聴覚資料を多く用いて、身近なものとして、研究と向かいあえるようにしています。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・2017年、文芸誌の「文学界」で新人小説月評を担当しました。 ・日本近代文学会運営委員(2015年4月～2017年3月)。 ・「"思い込み"から抜け出そう！LGBTと多様な社会を考える」(埼玉大学の渡辺大輔さんとの講演。アムネスティ・インターナショナル日本総会、2017年3月11日)

氏名	大嶋 良明 (おおしま よしあき) 教授
こんな研究をしています	現代のネット社会はどうなるのか、インターネットが我々をどのように変えるのか、これはテクノロジーのみの問題ではなく、広く人間の知的な営みに関わる問題であり文化の問題です。私たちはネット社会を「多文化情報空間」ととらえて、その特性や問題点を情報学の立場から学んでいきます。特にネット社会でのより良い自己実現を目指して、ソーシャルメディア、メディアリテラシー教育、Webを基盤とする情報通信、eLearningやePortfolio等の教育工学的手法の研究に関心があります。
こんな成果を挙げています	Y. Ohshima, “Environmental Robustness in Speech Recognition Using Physiologically-Motivated Signal Processing”, Ph.D thesis, Carnegie-Mellon University (1993). D. Kelly, 「記号論と都市」, 大嶋良明訳, 『異文化』, 2013, 第14号, pp.251-278. 大嶋良明, 「われわれにとって情報とは何か?」, 『異文化別冊: 国際文化情報学とは—その可能性と課題』, 2010, 通巻第1号, pp.18-31. 大嶋良明, 「夏期 SAにおける文化情報フィールドワークについて」, 『異文化別冊: 国際文化情報学とは—その可能性と課題』, 2010, 通巻第1号, pp.201-210. 大嶋良明, 「入門科目の講義ノートより」, 『異文化: 文化と情報をめぐって—文化情報学の試み』, 2004, 第5号, pp.1-10. 大嶋良明, 「学部初年次教育における授業改善の試み—ICTとePortfolioを中心として」, 『法政大学教育研究』, 2014, 第6号, pp.65-82.
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	情報学 (インターネット、Web2.0), 教育工学 (特にePortfolio、eLearning) 電気・計算機工学 (信号とシステム、通信、確率過程、機械学習) 音声情報処理 (音声認識、音響モデル、対話システム、ロボストネス) デジタル信号処理 (特にコンピュータ音楽、音響、マルチメディア) 応用言語学 (異文化コミュニケーション)
こんな授業を行なっています	現代社会をメディアとしての諸特性においてとらえ分析することを目指しています。また英米現代文化の科目として英語科教職を目指す学生にも履修を勧めます。 【多文化情報メディア論 IA】 音をテーマにとりあげ、欧米文化のなかで音楽音響と音声現象を記述しメディアに記録として定着させるさまざまな試みに焦点をあてる。Patrick Feasterの近著”Pictures of Sound”の原書講読と資料渉猟、関連音源の聴取体験を通して音響とメディアへの理解を深める 【多文化情報メディア論 IB】 音楽と楽器をテーマとしてとりあげる。スミソニアン学術協会が中心となって編纂するArtefactsシリーズよりFrode Weium, Tim Boon編著の原書講読を通して、欧米での科学技術の発展と器楽演奏、音楽の表現や制作との関連を学ぶなかから音楽文化の理解に努める
学会や社会でこんな活動をしています	法政大学市ヶ谷情報センター長 (2006-2007) 法政大学グローバル人材育成推進事業ePortfolioプロジェクトリーダー(2013.9-2015.3) 法政大学FD推進センター調査プロジェクトリーダー(2012-2014) 法政大学教育開発支援機構 ICT教育プロジェクト委員(2011-2012, 2013-)

氏名	<p>大中 一彌 (おおなか かずや) 教授</p>
こんな研究をしています	<p>学問分野：政治学、政治思想 地域：フランス語圏 主な関心：ことばや文化と政治の関係に興味がある。 キーワード：シティズンシップ、ヨーロッパ、権力、グローバル化、移民</p>
こんな成果を挙げています	<p>【論文】 「自発的隷従とは何か ラ・ボエシー『反一者論 (コントラン)』をめぐって」 (2013年) 「越境するシティズンシップとポスト植民地主義」(2010年) 「パスカルにおける情念と政治 —アルチュセール研究の視点から—」(2010年) 「権力」(2009年 ※政治学の教科書『現代政治理論』の一章) 【翻訳】 ルイ・アルチュセール『再生産について イデオロギーと国家のイデオロギー装置』(上)(下) エティエンヌ・バリバル『ヨーロッパ、アメリカ、戦争』 ※書誌情報の詳細は「法政大学学術研究データベース」を参照してください。 http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/theses.html</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>知識人論の分野でも、いくつか学会発表や翻訳をしている。 2013年度から5年間の予定で、「地中海両岸におけるポスト植民地期の政治変動と民衆-知識人関係」という主題の研究を進めている。 ※この研究課題についての詳細は、「科学研究費助成事業データベース」を参照してください。 http://kaken.nii.ac.jp/d/r/60434180</p>
こんな授業を行なっています	<p>担当科目：多言語社会論A・B 基本姿勢： ①自分とは異なるものの考え方や文化に接する機会を提供することで、自分のなかにある文化的偏見や無知に気付く機会を提供する。そして、そうした偏見や無知をすぐさま正そうとするよりは、そもそもどのような環境や仕組みがあるかゆえに、偏見や無知が発生してくるのかを学問的に理解しようとする態度を養う。 ②語学や思想史、外国事情などの専門知識・スキルの伝達も重視しています。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>フランスやEU関連の文化交流に協力してきています。 法政大学で開催した講演会としては、 ルイ＝ジョルジュ・タン「同性愛と人権の問い」(2011年：アジア・フランコフォン大学の一環) フロランス・ケメックス「われわれの有限性をどうするか」(2009年；エラスムス・ムンドゥス・プログラム「ユーロ・フィロソフィー」の一環)等</p>

氏名	熊田泰章（くまた よしのり） 教授
こんな研究をしています	「テクスチュアリティ研究」が専門です。このところ書いている論文では、「間文化性＝インターカルチュアリティ」という新しい概念について研究しています。「主体」が他者との関係性の中に構築されるように、「文化」も、実体的に存立しているのではなく、関係的に構築されるものです。「文化」の仕組みをこのように定めることによって、排他的になることと無縁に「個々の文化の独自性」を主張できると考えています。
こんな成果を挙げています	<p>「世界理解の表出としての言語テキストと図像テキストーボッシュとゴヤの絵画を例としてー」『異文化 17号』法政大学国際文化学部紀要、2016年</p> <p>「グローバル化の原理としての記号的従属および動的編成と相互変容ー個人と文化の相互的生成と変容についてのー考察ー」『異文化 16号』法政大学国際文化学部紀要、2015年</p> <p>「唯一であることの相対的価値についての試論ー芸術作品における内在性と行為性ー」『異文化 15号』法政大学国際文化学部紀要、2014年</p> <p>「絵画のナラトロジーー試論ー知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についてのー考察ー」熊田泰章編『国際文化研究への道ー共生と連帯を求めて』彩流社、2013年</p> <p>「翻訳の<前提/結果>としての「多文化性」に関する考察ー<個々の/総体としての><テキスト/文化>が<依拠する/作り出す><独自性/普遍性>ー」『異文化 13号』法政大学国際文化学部紀要、2012年</p> <p>「文化の複数性原理における自己と他者ー多文化主義を問い返す反復する問いー」『異文化 12号』法政大学国際文化学部紀要、2011年</p> <p>「<間文化性概念>による<多文化主義>の再構築の試みー空虚なシミュラクルの限界と持続性を求めてー」『異文化 11号』法政大学国際文化学部紀要、2010年</p> <p>「テキスト外参照性を封じる語り手の声ーアゴタ・クリストフ『悪童日記』における拒絶する語り」『異文化 10号』法政大学国際文化学部紀要、2009年</p> <p>「それ自体であることの円環ーテキストとしての自己と他者ー」『異文化 9号』法政大学国際文化学部紀要、2008年</p> <p>「意味生成を可能とする普遍原理としての間テキスト性ー意味伝達の障壁を克服する間テキスト性の働きー」『異文化 8号』法政大学国際文化学部紀要、2007年</p> <p>「作品と受容者のインターテクスチュアリティ」『異文化 7号』法政大学国際文化学部紀要、2006年</p> <p>「意味行為の成立が線的であることの強制と自由ーそして日本語における停滞可能な発話についてー」『異文化 2号』法政大学国際文化学部紀要、2001年</p> <p>「物語る意志と読む意志ー小説作品を媒体とする二つの持続する行為ー」立川洋三編『探求・ドイツの文学と言語』東洋出版、1995年</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>自分の研究史として挙げれば、以下のことについて考察してきました、また、継続しています。</p> <p>1. グリム昔話の構造研究・分類研究 2. 小説の語りの構造・ナラトロジー</p> <p>3. 読者論 4. 翻訳論 5. 文化記号論</p>
こんな授業を行っています	<p>「個」がいかんにして存在するにいたったか、また「個」がいかんにして表象されるにいたったかについて考察することを通して、「間主観性」「間テキスト性」「間文化性」という概念をつきつめていくことを課題としている。</p> <p>修士課程の授業では、目下のところ、肖像画を取り上げて、以下の著作を精読している：ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛ールネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002年</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>日本全国の約50大学に国際文化学部・国際文化研究科あるいはそれに類する名前で、「国際文化学」を専門とする学部・学科・大学院があります。「国際文化学」を研究する学会である日本国際文化学会は、2001年に発足し、現在、これらの大学の教員・学生、また国際交流に従事する方々などからなる約400名の会員が、研究発表会や学会誌に研究の成果を発表しています。私は、この日本国際文化学会の発足呼びかけ人の一人であり、常任理事として働き、2007年度～2010年度は会長を務めました。大学院生の研究発表を歓迎します。法政大学では、2015年度・2016年度副学長（大学院担当）の職務に就いています。</p>

氏名	興石 哲哉 (こしいしてつや) 教授
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語形態論 (英語の語を中心とした領域. 形態論が絡む音韻現象, 形態現象, 言語史なども含む). ・ 英語音声学・音韻論 ・ 英語辞書学 (英語辞書の歴史, 比較等). ・ 日本語との対照研究 (書記体系, 語彙構造等). <p>なお, 私の場合, 一つの事象を理論的に突き詰め深化させていくタイプの研究ではなく, さまざまな事象を記述し, 一見無関係に思われることに関係性を見出して, 新たな光を当てていくタイプの研究になることが多いです.</p>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・ ‘Two Types of Adjectives and the History of English Word Formation.’ (単著, 論文) 2012年『歴史言語学』(<i>Historical Linguistics in Japan</i>) 第1号 23-38頁掲載. ・ <i>Collateral Adjectives and Related Issues</i>. (単著, 書籍) 2011年 Peter Lang 社(Bern, Switzerland) より出版. ・ ‘An Analysis of <i>Cambridge Advanced Learner’s Dictionary</i>.’ (共著, 論文) 2005年『Lexicon』(岩崎研究会) 第35号 127-184頁掲載. ・ ‘Collateral Adjectives, Latinate Vocabulary, and English Morphology.’ (単著, 論文) 2002年 <i>Studia Anglica Posnaniensia</i> 第37号 49-88頁掲載. ・ ‘Collateral Adjectives and Related Issues.’ (韓国檀国大学校大学院での講演) (The 1st Overseas Lecture Based on the Jissen-Dankook Academic Exchange Agreement)
ほかに, こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語が絡む事象全て. ・ 言語間の比較・対照研究全般. ・ 英語, 日本語での作文指導, 論文作成指導. ・ パソコン等を利用した英語の新しい学習法. ・ 時事英語, 英語のジャーナリスティックな表現等. ・ 英語圏, 欧州の言語・文化と歴史.
こんな授業を行なっています	<p>学部授業では, パワーポイント等のヴィジュアルを用いたプレゼン形式を採用しています. さらに授業支援システムによる事前の予告, 事後のフィードバック等を行い, 履修者が理解を深められるよう心がけています.</p> <p>大学院の授業では, 学生の興味, 実力等がさまざまであるため, 履修者との話し合いをベースに, 授業の形式, 授業の進め方等を決めていきます. 英語学, 言語学の知識のない学生でも理解できるように, 解説を多くしながら英語や文化について理解を深めていくように努めています.</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>英語学的な知識を英語教育に活かすため, かつて3年経過, 5年経過等の中高英語教員の研修講師を勤め, 辞書指導のあり方等を指導してきました. また, 海外大学院で10年余り研究生生活を送った経験から, 英語圏留学全般についてのコンサルティングや, 海外の大学等との交流事業の企画・推進を行ってきました. 個人的に日本スコットランド協会に所属し, スコットランド文化の紹介・普及にも, 努めています.</p>

氏名	佐々木 一恵 (ささき もとえ) 准教授
こんな研究をしています	19 世紀末から 20 世紀初頭のニューヨークにおけるプロテスタント教会による政治・社会改革活動から、都市公共領域と宗教との関係について、ジェンダーの視点を交え検討しています。
こんな成果を挙げています	<p>「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー —女子教育とジャンヌ=ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリーズ—ナショナルを超えて』上智大学出版社、2018年。</p> <p><i>Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century</i> (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).</p> <p>“Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” <i>The Japanese Journal of American Studies</i> (no.23, 2012).</p> <p>「キンボ・アボの大陸間移動とグローバル・ヒストリー」、『異文化別冊』(2010年)。</p> <p>“American New Women Encountering China: the Politics of Temporality and Paradoxes of Imperialism, 1898-1927,” <i>Journal of Colonialism and Colonial History</i> 10, (no.1, Spring 2009).</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのアメリカにおけるジェンダー問題 ・公共領域と宗教、世俗主義の形成 ・アメリカ合衆国のプロテスタント教会と社会運動
こんな授業を行っています	<ul style="list-style-type: none"> ・19 世紀末から 20 世紀末にかけての歴史学の変遷を、周辺領域（文学・文化人類学・社会思想）の動向と関連付けながら検討しています。 ・「世界史」というパラダイムそしてイデオロギーが、近代の歴史意識をどう形作ってきたのかを検討しています。
学会や社会でこんな活動をしています	アメリカ学会の英文ジャーナルの編集委員をしています。

氏名	佐藤 千登勢 (さとう ちとせ) 教授
こんな研究をしています	20世紀初頭のロシア・アヴァンギャルド芸術を専門としています。とりわけ、ロシア・フォルマリストの芸術理論、文学作品、映画（脚本）を中心に論文や本をまとめてきました。
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 『シクロフスキイ 規範の破壊者』（南雲堂フェニックス、2006年） ・ 共著『ロシア文学への扉』金田一真澄編著（慶應義塾大学出版会、2007年） ・ 『映画に学ぶロシア語：台詞のある風景』（東洋書店、2009年） ・ 『チェブラーシカ』（東洋書店／ユーラシアブックレット、2010年） ・ 「幾何学的フォルムの可能性：ヴィクトル・シクロフスキイの場合」、貝澤哉、野中進、中村唯史編著『ロシア・フォルマリズム：言語・メディア・知覚』（せりか書房、2012年） ・ 「良心の旋律：ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ」、鈴木靖、法政大学国際文化学部編『国境を超えるヒューマニズム』（法政大学出版局、2013年） ・ 「ロシア・東欧の映画人」の項目概説、『岩波世界人名大辞典』二分冊（岩波書店、2013年）
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 映画学 ・ メディアと知覚の問題 ・ 抑圧と被抑圧の現象について
こんな授業を行なっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「多文化芸術論1」にて、ソ連・ロシア、チェコ、ポーランド、ハンガリーの映画作品や音楽を中心に、国家のイデオロギーと芸術の関係について、また芸術の審美的要素について、院生のみなさんと作品を鑑賞しつつ、意見を交換する授業をおこなっています。 ・ メンバーの傾向によって、音楽、映画の他にアニメーション作品など、ジャンルを変えて、作品を部分的に鑑賞し、議論することもあります。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本ロシア文学会の理事をしています。 ・ 日本ロシア文学会関東支部運営委員を務め、支部事務局を定期的に担当しています。 ・ 慶應義塾大学通信教育部の教科書『ロシア文学』作成に携わっています。

氏名	重定 如彦 (しげさだ ゆきひこ) 教授
こんな研究をしています	分散オペレーティングシステム、ユビキタスコンピューティング。 最近はユビキタスコンピューティング分野の中で空間情報システムに関連する研究も行っています。
こんな成果を挙げています	「Interoperable Spatial Information Model and Design Environment Based on ucR Technology」 IEICE Transactions on Information and Systems, 2013 「Interoperable spatial information system architecture based on ubiquitous ID infrastructure」 IEEE Computer Software and Applications Conference Workshops, 2011 「ucR based interoperable spatial information model for realizing ubiquitous spatial infrastructure」 Proceedings of IEEE Compsac 2010 「A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON」 In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 「Design of VAQL: A Visual Script Language System which Controls and Extends Applications on a Graphical User Interface」 1996 『実習 情報リテラシ』サイエンス社, 2011 『学生のための詳解 Visual Basic』東京電機大学出版局, 2009 『実習 Word—基礎から Excel・PowerPoint との連携まで』サイエンス社, 2008
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	コンピュータのプログラミングによるものづくりにも関心を持っています。
こんな授業を行なっています	現在高度に情報化・ボーダレス化した国際社会においてあらゆる情報が電子化され、コンピュータネットワークによって構築された知的情報空間において共有されるようになってきています。そのような共用空間における文化の受信・発信のありかたについて論じ、電子メディアの文化情報としての特性を考察します。本年度の具体的なテーマは、World Wide Webにおける情報の基本的な形態であるハイパーテキストとします。具体的にはハイパーテキストの成り立ちや特性を理解し、ハイパーテキストシステムにおける情報の受信・発信のありかた、文化情報としての特性、今後の展望など、さまざまな考察を行います。
学会や社会でこんな活動をしています	アジアの諸国を対象とした留学生の奨学金の選考委員を行っています。

氏名	曾 士才 (そう しい) 教授
こんな研究をしています	中国における少数民族および日本における中国系移民・華僑華人を二本柱にして、エスニック・マイノリティに関する文化人類学的研究を行っています。特に、民族文化（宗教、儀礼、慣習、言語など）が、年中行事や教育、観光などを通して具体的にどのような自己表象または他者表象されるのかを分析し、民族意識、国家（ホスト社会）と民族集団との関係を歴史的、社会的に考察し、最終的には民族間の共生の実現に関心を持っています。
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ○「日本残留中国人—札幌華僑社会を築いた人たち」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社2016年 ○「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編『民族文化資源とポリテクス—中国南部地域の分析から』風響社2016年 ○『落地生根—神戸華僑と神阪中華会館の百年〈増補版〉』（共著）研文出版2013年 ○「清末から現在に至る近代学校教育から見えてくるもの：貴州ミャオ族の事例」岡洋樹編『東北大学東北アジア研究センター・シンポジウム 内なる他者—周辺民族の自己認識のなかの「中国」—モンゴルと華南の視座から』東北大学東北アジア研究センター2009年 ○『中華民族の多元一体構造』（費孝通編著）（共訳）風響社2008年 ○「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社2008年 ○『世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』（共編著）明石書店2005年 ○「中国における民族観光の創出—貴州省の事例から」『民族学研究』66巻1号、2001年
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	東アジア比較民俗学（衣食住、信仰、習俗、説話など） アジア系移民の比較 現代中国の社会と文化
こんな授業を行なっています	わたし自身は文化人類学的、民俗学的な手法で研究していますが、理論的アプローチよりも、フィールドワークに基づいた、実証的な研究を行っています。授業では、研究史を押さえながら、優れたモノグラフを読むなかで、一緒に考え、議論を深めます。
学会や社会でこんな活動をしています	<p>1981年に創設したインターカレッジな研究会・仙人の会の発足時からのメンバーとして、月例会の運営に関わっています。この会は東アジア、東南アジア大陸部に関心のある教員、学生が集い、議論し、切磋琢磨する場になっており、月例会での発表は若手研究者にとってはいわば登竜門になっています。</p> <p>また、日本華僑華人学会の常任理事（2003年から）、会長（2014・15年）を務めており、研究会、講演会など学会の諸活動を通じて、華僑華人研究の充実とネットワークの拡大を図っています。（仙人の会、日本華僑華人学会ともにHPあり）</p>

氏名	高柳 俊男 (たかやなぎ としお) 教授
こんな研究をしています	<p>専門は朝鮮近現代史で、日本との関係を中心に研究しています。激動の歴史のなかで、人々が海峡を越えてお互いをどう認識し、移動や交流・摩擦を繰り返してきたのか、その過程全般に関心があります。</p> <p>近年はとくに、日本に渡ってきた人々（在日朝鮮人：総称）の経てきた歴史や、そのなかで培われた文化について重点的に研究しています。従来見落とされてきたものの、本来大事と思われる埋もれた事実や資料の掘り起こしに力を注いでいます。</p>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・「中西伊之助と朝鮮」（『季刊三千里』第29号、1982年） ・「ポンチ絵に見る日本人の朝鮮認識」（『すくらむ』第216号～第227号、全12回連載、1985年） ・（共訳書）『在ソ朝鮮人のペレストロイカ－朝鮮語新聞「レーニン・キチ」を解説』（凱風社、1991年） ・「東京・枝川町の朝鮮人簡易住宅建設をめぐる一考察」（立教大学史学会『史苑』第56巻第1号、1995年） ・（復刻と解説）『朝鮮時論』（緑蔭書房、日本植民地文化運動資料9、1997年） ・「東京に朝鮮関連の史跡を訪ねる」（大阪国際理解教育研究センター『Sai』第32号～37号、全6回連載、1999年～2000年） ・「映画『海を渡る友情』と北朝鮮帰国事業」（『在日朝鮮人運動史研究』第29号・第30号連載、1999年・2000年） ・「渡日初期の尹学準－密航・法政大学・帰国事業」（『異文化』第5号、2004年） ・「在日朝鮮人と短歌－韓武夫を手がかりとして」（『社会文学』第26号、2007年） ・「留学生を主対象とする国内研修実現への歩み－法政大学国際文化学部の教育実践の記録として」（熊田泰章編『国際文化研究への道』彩流社、2013年） ・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために－国際系学部の事前学習授業の実際から」（学輪 IIDA 機関誌『学輪』第2号、2016年）
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>韓国・朝鮮関係なら、広く興味があります。ほかに、満州移民をはじめとする東アジアの民族問題や、多文化共生に向けた日本社会の動向全般にも関心があります。</p> <p>研究のスタイルとして、文字資料を活用するのは当然ですが、映像資料の収集・活用や、体験者からの聞き取りにも力を注いでいます。また、イメージをふくらませるため、なるべく現地を訪れ、「足で稼ぐ」ことをモットーとしています。一例として、「歩いて知る東京の中の『朝鮮』」というフィールドワークを毎年実施しています。</p> <p>最近では、学部のSJ国内研修の担当者として、長野県南部地域に詳しくなり、おかげで南信という一地方から日本や世界を見つめ直す面白さを味わっています。</p>
こんな授業を行なっています	<p>どんな学問をやるにしても、その学問が形成されてきた時代への考察は欠かせません。春学期は、特定の個人の伝記的著作物を媒介に、戦前・戦後の日本の時代潮流や社会運動を、とくにアジアとのかかわりの中で追う授業を行っており、これまで鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次などを取り上げてきました。</p> <p>秋学期は、在日朝鮮人を軸とした日本の多民族共生がテーマですが、6年前から始めた、在日朝鮮人に関連して出された戦後のパンフレット類を時代を追って読む作業を、まだもう少し続けることになりそうです。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>大学院に入学した1981年以来、在日朝鮮人運動史研究会のメンバーとして会の運営に携わってきましたが、こここのところ忙しく、休みがちです。</p> <p>大学1年生のとき、HNKに朝鮮語講座開設を要望する署名運動が起こり、そこに集まった人たちで読書会を作りました。それ以来約40年、私のところを事務局に「鐘声の会」として例会活動を続け、ミニコミ誌『鐘声通信』を月刊で460号あまり発行しています。どこまで続くか不明ですが、目標としてきた柏木義円の『上毛教界月報』全459号を最近越えました。今後とも「継続は力なり」で頑張っていきます。</p>

氏名	中島 成久 (なかしま なりひさ) 教授
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・文化人類学、東南アジア (インドネシア) 研究 ・インドネシアの土地紛争のポストコロニアリズム論的研究 ・熱帯林の資源管理と紛争の研究 ・学術振興会科学研究費基盤研究 (C) 「アブラヤシ開発で危機に瀕するインドネシアの国立公園の社会的文化的研究」 (2017 年 4 月～2020 年 3 月)
こんな成果を挙げています	<p>著書・論文</p> <p>2018 年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Expulsion of Nias Squatters and Expansion of Oil Palm Development, <u>Journal of International Economic Studies</u>, No. 32, The Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University <p>2017 年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アブラヤシ・プランテーション労働者をめぐるヘゲモニー関係、『異文化論文編』18 号 ・クリンチ・スブラット国立公園のスクウォッター——ジャンピ州ムランギン県での調査 報告、『インドネシアニュースレター』96 号、日本インドネシア NGO ネットワーク (JANNI) <p>2016 年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベネディクト・アンダーソン『<境界>を生きる思想家たち』第 9 章、国際社会人叢書 2、榎木玲子/法政大学国際文化学部編、法政大学出版会 <p>2013 年中島成久・西芳実編『原発震災被災地復興の条件——ローカルな声』JCAS Collaboration Series 7, 地域研究コンソーシアム (JCAS)、京都大学地域研究統合情報センター</p> <p>2011 年『インドネシアの土地紛争——言挙げする農民たち』創成社新書</p> <p>2010 年『森の開発と神々の闘争——改訂増補版屋久島の環境民俗学』明石書店</p> <p>2004 年 (編著) 『グローバリゼーションのなかの文化人類学案内』明石書店</p> <p>1993 年『ロロキドゥルの箱——ジャワの性、神話、政治』風響社</p> <p>訳書</p> <p>2007 年 アン・ローラ・ストーリー『プランテーションの社会史、デリ/1870-1979』、法政大学出版会、</p> <p>1995 年 ベネディクト・アンダーソン『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求——』、日本エディタースクール出版部</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・多国籍企業研究——企業のグローバル化とグローバル化、文化摩擦、多国籍企業の CSR (企業の社会的責任) ・世界遺産をめぐる文化の政治学
こんな授業を行なっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ナショナリズム/エスニシティ論 <p>受講生の興味に沿いながら、ナショナリズムとエスニシティに関する基本的な文献を読み進める学部の授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国家と民族 (「宗教と国民統合/非統合」というテーマで、アメリカ、インドネシア、日本の政治と宗教を解説) ・他に、地域紛争とエスニシティ、他者イメージ論、東南アジアの文化担当
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・国際文化研究科長 (2014 年 4 月～2016 年 3 月) ・日本国際文化学会理事 (2011 年 7 月～2013 年 7 月) ・法政大学比較経済研究所運営委員 (2001 年 4 月 1 日～2008 年 3 月 31 日) ・日本文化人類学会、日本国際文化学会 ・インドネシア関連 NGO 活動 ・故郷である屋久島ウォッチャーとして行動し、発言している (高校卒業まで屋久島で過ごしました!!)

氏名	廣松 勲 (ひろまつ いさお) 専任講師
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ①フランコフォニー文学研究 (カリブ海域諸島とカナダ・ケベック州) ②地域研究 (同上)
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ①評論：「第5章 エドゥアール・グリッサン (1928-2011)：〈関係〉の詩学から全-世界へ」、『国際社会人叢書2：〈境界〉を生きる思想家たち』、榎木玲子／法政大学国際文化学部編、法政大学出版局、2016年、105-129頁。 ②論文：「現代ケベック文学の諸潮流：移民文学と新郷土文学を中心に」、『Nord-est』(日本フランス語フランス文学会東北支部会報)、第7・8号合併号、日本フランス語フランス文学会東北支部会、2015年、84-105頁。 ③論文：「Esprit d'avant-garde dans les romans de Raphaël Confiant」, dans <i>Expérience de l'extrême, la culture et l'art d'entre-deux guerres</i> (Actes du colloque international d'automne 2014), CFAF, 2014, pp. 177-191. ④口頭発表：「L'identité québécoise et ses contextes」, communication présentée dans la table ronde 2 : Francophonie et identité – tour d'horizon de cinq pays et régions francophones : Vietnam, Canada, Québec, Martinique et France, Congrès international Fukuoka (SJDF, SCELLF, APFT), Université Seinan Gakuin, le 21 novembre 2015. ⑤口頭発表：「ケベック文学における間文化主義の誕生」, 2015年度ケベック学会全国大会の「シンポジウム：間文化主義再考」での発表, 跡見学園女子大学, 2015年10月3日。 ⑥口頭発表：「フランコフォニーとは何か? : カナダ・ケベック州とカリブ海域諸島を中心に」, 慶應SFC・フランス語研究室主催の「フランス語特別週間」での発表, 2015年4月30日。 ⑦口頭発表：「研究職に向けた就職活動：必要なのは努力、それとも運?」, 東北大学フランス語フランス文学研究室主催の「就職講演会」での発表, 2015年2月21日。 ⑧口頭発表：「フランス語圏社会における言語と文化：カリブ海域諸島におけるクレオール性運動を中心に」, 慶應SFC・先端研究『言語と文化』の第10回での発表, 2014年6月18日。 ⑨口頭発表：「現代ケベック文学の諸潮流：移民文学と新郷土文学を中心に」, 日本フランス語フランス文学会の「ワークショップ：カナダ文学の現在：ケベックを中心に」での発表, お茶の水女子大学, 2014年5月25日。 ⑩書評：「書評：ダニー・ラフェリエール著『吾輩は日本作家である』(立花英裕訳)『甘い漂流』(小倉和子訳)」, 『ケベック研究』, 第7号, 2015年, 111-115頁。 ⑪編集・翻訳・エッセイ・書評：日本フランス語圏文学研究会会報『Archipels francophones : bulletin du Cercle d'études japonais des lettres francophones』第5号の編集／巻頭エッセイおよびインタビューの翻訳／エッセイ・書評の執筆, 2015年8月4日。 ⑫講演会報告：「講演会・シンポジウム報告：ブリュノ・クレマン教授講演会『ジャン＝ポール・サルトルにとってボードレールとフローベールとは本当は誰か?』」, 『フランス文学研究』, 第34号, 東北大学フランス語フランス文学会, 2014年, 49-51頁。 ⑬インタビュー：「1. Langue et littérature / 1-1. HIROMATSU Isao」(日仏両言語でのインタビュー収録), 『日本のケベック研究』, 日本ケベック学会, 2014年, 4-5頁。
ほかに、こんなジャンルに関心を持っています	<ul style="list-style-type: none"> ①ホラー映画, ドキュメンタリー映画 (特にフェイク・ドキュメンタリー) における物語・語りの構造 ②実話系怪談小説における物語・語りの構造
こんな授業を行なっています	<p>2016年度春学期：「国際文化研究A」(3コマ分担当)</p> <p>2016年度秋学期：「多言語芸術論II」</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>【所属学会および役職・活動など】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①日本フランス語教育学会：初中等教育委員、高校生フランス語暗唱コンクール向けの課題テキスト選定 (2013年～) ②日本ケベック学会：理事 ③日本フランス語フランス文学会：20世紀部会委員 ④日本フランス語圏文学研究会 ⑤国際フランス語圏研究会議 (CIEF)

氏名	松本 悟 (まつもと さとる) 教授
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・開発援助の制度、効果、影響 (国際組織、日本政府、NGO) ・調査の機能 (特に環境・社会影響評価) ・メコン河流域の地域研究 ・開発と環境 ・マスメディア研究 (特に内容分析)
こんな成果を挙げています	<ol style="list-style-type: none"> 1. 『調査と権力』 (東京大学出版会、2014年) 2. 『NGO から見た世界銀行—市民社会と国際機構のはざま』 (共編著、ミネルヴァ書房、2013年) 3. 「世界銀行と地球環境基金—開発課題化される環境問題の教訓」 (『季刊環境研究 No. 171』、日立環境財団、2013年) 4. 『人々の資源論』 (分担執筆、明石書店、2008年) 5. 『徹底検証ニッポンのODA』 (分担執筆、 commons、2006年) 6. 『シリーズ国際開発第3巻 生活と開発』 (分担執筆、日本評論社、2005年) 7. 『被害住民が問う開発援助の責任—インスペクションと異議申し立て』 (編著、築地書館、2003年) 8. 『People and Forest - Policy and Local Reality in Southeast Asia, the Russian Far East, and Japan』 (分担執筆、Kluwer Academic Publishers、2003年) 9. 「インドシナ共産主義政党とマスメディア—ラオスとベトナムの新聞統制」 (『マスコミュニケーション研究 56』、2000年) 10. 『メコン河開発—21世紀の開発援助』 (築地書館、1997年)
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	上記研究分野以外に、貧困、紛争、資源、森林に関する研究であれば、大学院での指導が可能です。研究方法としては、院生の研究目的に沿って、インタビューや文献を研究資料とする質的調査の指導、統計データやアンケートに基づく量的調査については助言を行います。
こんな授業を行なっています	国際協力の概念やアクター (国際機構、NGO) の役割、開発援助の社会・文化的側面、新興ドナー (中国、韓国、タイなど)、開発や開発援助が少数民族に及ぼす影響について学びます。毎回文献を指定し、受講生が分担して講読・発表し、教員が補足的な講義を行います。なお、履修する院生の関心をふまえて、授業内容や使用する文献を柔軟に変更する方針です。
学会や社会でこんな活動をしています	NHK 報道記者 (1987-92)、日本国際ボランティアセンター (JVC) ラオス事務所代表等 (1992-96)、特定非営利活動法人メコン・ウォッチ代表理事等 (1999-)、国際環境 NGO FoE Japan 顧問 (2009-)、アジア太平洋資料センター理事 (2010-)、外務省開発協力適正会議委員 (2011-17)、JICA 環境社会配慮助言委員会委員、ジェトロ環境社会配慮諮問委員、その他、2009年以降継続して行われている「事業仕分け」や「行政事業レビュー」の評価者や国の歳出改革ワーキンググループのメンバーとして政府の予算・決算・制度のレビューをしています。

氏名	森村 修 (もりむら おさむ) 教授
こんな研究をしています	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代哲学 (現象学・現代ドイツ・フランス哲学・比較哲学) ・現代倫理学 (ケアの倫理学) 2. 日本近代哲学 (明治期以後の日本哲学・日本思想) 3. 現代アートの哲学 (アート理論) ・美学 4. パフォーマンス研究 (日本の現代演劇など)
こんな成果を挙げています (過去3年以内)	<p>《著書・論文》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子／法政大学国際文化学部編『〈境界〉を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年【現代倫理学】 2. 森村修「ヨーロッパ」という問題—テロルと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道: 共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013年【現代哲学】 3. 森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から間文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第42号、2016年【日本哲学・Intercultural Philosophy】 4. 森村修「センの「道徳哲学」(1) ——パトナム「事実／価値二分法の崩壊」論を手がかりに(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化17』論文篇、2016年【現代倫理学】 5. 森村修「「性的差異」のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第41号、2015年【日本哲学・ケア倫理学】 6. 森村修「喪と／あるいはメランコリー(1) ——デリダの〈精神分析の哲学〉(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化16』論文篇、2015年【現代哲学】 7. 森村修「「連続と切断」——田辺元の後期数理哲学における「ベルクソン主義」について」、『比較思想研究』第40号、2014年【日本哲学】 8. 森村修「身体化された「ケアの倫理学」(1) ——フェミニスト倫理学と「和辻倫理学」の比較哲学的考察」、法政大学国際文化学部編『異文化15』論文篇、2014年【日本哲学・ケア倫理学】
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代アートや現代デザインの思想を美学・芸術哲学の側面からきちんと考えたい。最近、森美術館で開催された「村上隆五百羅漢展」を見て、視覚芸術に対抗できる哲学を作ることは可能かということを実際に考えている。 ・ 9.11に始まる「テロル」と3.11の「放射能」の時代に、宗教と科学(情報学)の関係を踏まえて、哲学・倫理学は何ができるかという問いを実際に考えたい。 ・ 自分なりに納得できる哲学・倫理学の業績を仕上げ、早く陶芸の修行に戻りたい(東北・栗駒山に「栗駒焼大溪窯」を開いた師匠が80歳を過ぎて、弟子の帰還を待ってくださっている)。
こんな授業を行なっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代哲学／現代倫理学のテキストを原書(英語・ドイツ語・フランス語)で読み、レジュメを書き、テキストの解釈を巡って議論を行う。地味だけど、本を「読む」(活字を「見る」のではない)ことがすべての研究の基本。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2013年度から比較思想学会の評議員をつとめていたが、2016年度から理事をつとめることになった。 ・ また、『ケアの倫理』(2000年)出版を機に、知的障害者の施設「財団法人たんぼぼの家」(奈良市)と関わっている。「たんぼぼの家」には、アートとケアの実践を繋ぐために発足した「アートミーツケア学会」の事務局があり、学会の論文査読委員もつとめている。 ・ プロのデザイナーの先生と共同で学部のゼミを持っている。森美術館(六本木ヒルズ併設・六本木)の元統括ディレクター(現・森ビル株式会社顧問)が友人なので、学部であれ大学院であれ、現代アートと哲学思想のコラボレーションや、アート・マネジメントに関する企画も考えている。